

KyotoAR を受診される患者様へ

～検査の注意事項・同意～

(重要) 主治医の先生も必ずお読みいただき、患者様にご説明ください。

当施設における診察、検査につきましては全身麻酔が必要な場合があります。迅速かつ安全に診察・検査が実施できるよう下記の注意事項を十分にご理解いただいた上でご依頼いただきますようお願いいたします。

1. 絶食・絶水について

診察・検査の 12 時間前から絶食、3 時間前から絶水をお願いします。

注) 絶食・絶水をされていない場合は診察・検査が中止となる場合がございます。

2. 麻酔リスクについて

受診する科や検査内容により全身麻酔をする場合もございます。何らかの異常を認める動物に対して麻酔をかけ検査を行うこととなりますので、容態が急変する可能性があります。当施設では安全性の高い麻酔方法を採用し万全の体制で検査に臨みますが、残念ながら 100%安全な麻酔はありません。不測の事態により脳死状態に陥る、あるいは死亡するといった不慮の事態が起こる可能性はないとは言いきれません。突発的な不慮の事態が生じた場合、速やかに対処し治療を行います。

* 緊急の処置に伴う費用は別途請求させていただきます。

3. 麻酔前検査について

念のために主治医の先生で、麻酔前検査をお済ませください。

検査日の 1 週間前以内に検査をお願いします。

麻酔前検査が実施されていない場合は当日検査させていただきます。また追加検査が必要な場合は検査させていただきます (費用別途)。

* 異常がある場合は検査をお断りする場合があります。

* 検査結果は当日お持ちください。

4. 予約日時の厳守

予約日時の厳守をお願いします。やむを得ず遅れる場合、またはキャンセルされる場合は速やかに当施設にご連絡ください。

5. 麻酔処置に伴い、静脈に留置針を設置します。

その際、被毛の一部を刈らせていただくことがございますのでご了承ください。

6. 検査時間について

診察・検査内容によっては長時間におよぶ場合があります。時間に余裕を持ってご来院下さい。

* 麻酔の覚醒状況により時間がかかる場合や入院が必要な場合があります。

7. 費用の精算

診察・検査にかかる費用は当日お帰り前にお支払いいただきます。

(現金またはカード)。

* 検査後、治療・手術・入院が必要な場合もありますが、診察・検査費用については当日お支払いいただきます。

8. 患者様の留意点

往復の移動によっても容態が悪化する可能性があります。特にお帰りの際は麻酔覚醒直後のため動物の容態に十分お気を付けください。

9. 持ち物

主治医で実施した検査結果(血液検査, レントゲン検査, 超音波検査, 心電図検査など), 同意書, 検査依頼書(電話で申込みいただいた場合), その他患者様に必要と思われる物(既往歴などの詳細), 主治医が必要と判断したもの。

10. その他

別紙【各種検査について】も必ずお読みください。

注) 患者様の生命を最優先に、当施設の判断により診察・検査が中止される場合があります。

上記内容および別紙【各種検査】について十分にご理解をいただき、ご承諾いただける場合は別紙の同意書にご記入、ご署名・捺印をお願いいたします。

<主治医の先生へのお願い>

1. 上記注意事項について患者様にご説明をお願いします。
(不明な点はお問い合わせください) .
2. 麻酔前検査は患者様に必要とされる検査の実施をお願いします。
患部レントゲン検査・血液検査 (CBC, 血液生化学検査：肝機能・腎機能・血糖値・電解質) ・胸部レントゲン検査、その他必要な検査をお願いします。
3. 動物の状態によって静脈留置の処置をお願いします。(不可能であれば当施設にて実施いたします (費用別途) .

各種検査について

KyotoAR動物高度医療センターは、様々な疾病について診療・検査・手術・入院などの専門診療を行っております。ご依頼をいただいた場合や症状に応じて各種検査を実施し、診断、治療に役立てることが出来ます。検査は内容・状況に応じて全身麻酔または鎮静下で実施されます。各種検査についての詳細は下記をお読みください。

1. MRI 検査

当施設ではMRI検査で脳や脊髄などを画像として撮影し、その形や質感などの評価をしております。検査中動いてしまうと明瞭な画像データを得られないため、動物の場合通常全身麻酔下でMRI検査を行います。MRI検査自体は侵襲的な検査ではありません。金属が動物の体内に存在する場合、その周辺の部分の画像に乱れが生じ明瞭な画像データが得られないことがあります。影響が生じると考えられるものとしてマイクロチップ、骨折整復用のプレートやスクリュー、金属製クリップ、その他金属製インプラントなどがあげられます。ペースメーカーが装着されている場合はMRI検査は受けることが出来ません。動物がマイクロチップ、ペースメーカーなどの装着を受けている場合には検査を受ける前に申告してください。MRI検査時、病変の鑑別のために造影剤の投与（静脈注射）が必要になる場合があります。ただし個体により造影剤に対するアレルギー反応を起こす可能性があり、その場合は検査を中止することがあります。

検査の所要時間は2部位までの撮影でおおよそ1時間半～2時間となりますが、それよりも撮影部位が多い場合や大型犬の撮影にはさらに所要時間が長くなります。

2. CT検査

レントゲン写真を細かく連続的に撮影し、微細な変化を捉える画像検査で、骨や血管、胸部や腹部の様々な臓器を映し出せる検査です。病気の診断や治療方法を決定するために必要な情報が得られます。MRIと同じく検査中に動いてしまうと正確な画像が得られないため、ほとんどの場合で鎮静か全身麻酔が必要となります。

診断のために、造影剤を使用することがあります。基本的には副作用は少ないですが、アレルギー反応を引き起こす可能性があります。また、動物の状態によっては造影剤が使えない場合もあります。

その他のリスクとして、放射線の被爆が生じますが、通常、健康を害する程度の被曝量には至りません。

3. 脳脊髄液検査

脳脊髄液とは脳や脊髄を覆う液体で、脳や脊髄を衝撃から保護したり、栄養物質の輸送や老廃物の排泄などを行ったりすると考えられています。脳脊髄液検査をすることによりMRI検査などの他の検査では明らかでない脳や脊髄の炎症や出血などが検出できます。またMRI検査で検出された異常がどのようなものであるのか（例えば腫瘍性なのか炎症性なのかなど）、より詳しい情報を得ることができるため、総合的な診断に役立ちます。脳脊髄液の採取は後頭部と頸部の間もしくは腰椎の間に長い針を刺して行います。その際は動いてしまうと危険が伴うため全身麻酔下で実施します。また無菌的に行うためにその部位および周囲の毛刈りと消毒をします。熟練した獣医師が施術しますが、手技としては難度が高いものです。また頭蓋内圧の亢進がある場合には、脳脊髄液の採取により脳ヘルニアを起こす可能性があり、生命の危険を伴うことがあります。

4. 電気生理学的検査

神経系や筋肉の生理学的機能を評価するために行います。特に末梢神経筋疾患の診断に有用です。動いてしまうと正確な検査結果が得られないため通常全身麻酔下で、検査用の電極を用いて行います。

5. 整形外科的検査

関節の状態や骨の状態を評価するために行います。通常の整形学的検査は無麻酔で行うことが可能ですが場合によっては、鎮静下でレントゲン検査や各種検査を実施する場合があります。

6. 呼吸器レントゲン検査、透視検査

主に頭部から胸部までをX線撮影することで鼻咽頭、喉頭、気管、気管支及び肺などに異常がないかを

画像で確認する為の検査です。レントゲン検査は静止画ですが、透視検査ではリアルタイムの動きを動画で確認することができます。動物の状態や性格によっては鎮静下で行う場合があります。

7. 喉頭鏡検査

呼吸をするときに喉が正常に動いているかを確認すると同時に、腫瘍などがないかを肉眼的に確認する検査です。喉頭鏡を用いて目視で確認した後に軟性内視鏡鏡などを使ってより詳細に確認していきます。動物の口を開けての検査になりますので、鎮静下または全身麻酔下にて行います。

8. 気管支鏡検査

肺や気管、気管支の病気を診断するための内視鏡検査で、気管支鏡という細長く柔らかいカメラを用います。全身麻酔下にて口から気管支鏡を挿入し気管や気管支の内腔を観察します。また、肺胞内や末梢気管支に生理食塩水を注入し回収することで、細胞や肺胞内の液体を採取する気管支肺胞洗浄(BAL)や、生検鉗子を用いて病変部を採取する気管支鏡下の生検などがあります。検査による合併症として低酸素血症や出血などが挙げられます。

9. 消化管内視鏡検査

食欲不振、体重減少、嘔吐、下痢などの消化器症状を呈している動物に行う検査で、消化管内腔の観察や、生検鉗子を用いて病変部の組織の採取などを行います。動物の負担が少ないように体格によって軟性内視鏡のサイズを変え、全身麻酔下で軟性内視鏡を口から挿入し、食道、胃、十二指腸を観察する上部消化管内視鏡検査と、肛門から挿入し、直腸、結腸などの観察をする下部消化管内視鏡検査を行います。

10. 針生検・組織生検

超音波(エコー)ガイド下やCTガイド下で、病変部に細い針を刺し、細胞や組織を採取します。細胞診は、病変部の細胞を採取し顕微鏡で鏡検することで院内での推定診断をすることができます。組織生検は、組織生検針を用いて組織の一部を採取することで細胞診よりもより正確な診断を得ることができます。検査部位によっては出血などのリスクがあり、動物の状態や性格により鎮静下または全身麻酔下で検査を行います。

